

令和2年6月26日

大学入試の在り方に関する検討会議 意見書

北海道情報大学情報メディア学部4年 深堀 麻菜香
(公益財団法人子どもの貧困対策センターあすのば)

1. はじめに

北海道札幌市在住の大学生、深堀麻菜香です。現在は認定NPO法人 kacotam、NPO 法人訪問と居場所漂流教室、公益財団法人子どもの貧困対策センターあすのば、ぴらけしみんな食堂などの団体で札幌市を中心に北海道各地で子ども・若者支援をしています。私自身母子家庭で生活保護を利用していた経験もあり、当事者としての私の経験を様々な場で発信しながら子どもたちの声も代弁しています。

あすのばでは毎年3月に入学・新生活応援給付金の事業を行っていますが、給付金を受け取ったご家庭へのアンケート調査、「子どもの生活と声 1500人アンケート」の検討委員として末富さんとともに調査・分析をし、実際に給付金を受け取った高校生の家庭を訪問しヒアリングも行いました。

今回、大学入試の在り方に関する検討会議において、私が現在学習支援で関わっている中高生や、一緒に学習支援を行なっているスタッフ、受験生のサポートを行なっているスタッフに入試についてどう考えているか事前に聞いてみたところ、入試への不安や新型コロナウイルスで休校になっていた間の学習の遅れを気にしている学生が非常に多い印象を受けました。また、学習支援現場では休校前と比べ子どもたちの新規利用者が急増し利用者の需要は増す一方で、担い手であるスタッフ、特に大半を占める大学生ボランティア自身の生活も逼迫しており、スタッフの不足も生じ活動の運営は厳しいものとなっています。また、感染対策として一定の距離を取る必要もあり、利用者やスタッフの人数も制限しているため、支援が十分に行き届いているとは言えません。

今回私が紹介させていただくのは一部の声でしかありませんが、当事者のリアルな想いを少しでもお伝えできれば幸いです。

2. 情報格差

【高校生】

- ・共通テストについて具体的に知る機会が少ない。
- ・学校では教員から具体的な内容を説明されない。
- ・何も知らないなので共通テストが良いのか悪いのか判断材料がない。

【支援者】

- ・サポートが具体的にできない。
- ・不安を抱える高校生に寄り添いきれない。
- ・ネットで検索しても公的な情報がなかなか見つからない、分かりづらい。

→塾では共通テストへの対策がしっかりしているため、塾に通っているか否かで受験対策に格差が生じる。

→センター試験から何が変わるのか、どんな対策をしたら良いのかなど、正しい情報が当事者である高校生に伝わっておらず、学生や家族に不安が残っている。

3. 学生間不公平(経済的な負担や地域ごとの問題)

【高校3年生の声】

「センター試験だと先輩から教材のお下がりがもらえた。共通テストだと全部新しく揃えなければならない。4技能試験の準備をするのに参考書を買ったが、使う機会がなくなってしまった。家の経済状況を考えると受験にそんなにお金をかけられない。」

北海道は特に地理的な事情による地域格差が大きく、受験会場や交通機関がない地域もある。また、交通機関は本数が少ないうえ雪によるダイヤの乱れも多く、毎年センター試験会場に遅れてしまう学生も多数いる。

→教材費の補助は実現できなくとも、受験費用や移動費などの金銭的補助、受験会場が限られる4技能試験などでは地方会場の設置があるとよい。

4. 学校現場での対応の差について

- ・コロナで休校になっていた間の授業や学習が終わったことにされてしまっている。
- ・すでに英語4技能試験の準備として英検 IBA を生徒に受験させている中学校がある。
- ・進路を変更したくても「来年から入試が変わるから、今から進路を変えても受験準備は難しいよ」と先生がまともに取り合ってくれない。

→学校の対応によって学力差が開いてしまっている。

→進路選択の選択肢が狭められており、対応の差により格差が生じるおそれがある。

5. 北海道の事情

2022年から高校入試の制度が変更される

- ・ 1教科60点、5教科合計300点満点から1教科100点、5教科合計500点へ
- ・ 裁量問題の廃止

→2022年に高校入試を受験する中学3年生が2024年の大学入試を受験する世代
高校・大学ともに新しい入試制度に変更されるので負担が大きい

6. 最後に

通っている学校や教員の対応、住んでいる地域、家庭の経済状況など、さまざまな要因により受験に有利な学生、不利・困難を抱えてしまう学生の差がより広がってしまうことを懸念しています。文部科学省の方々には全ての学生に平等にチャンスがある入学試験の在り方を今後も検討していただきたいです。

当事者である高校生を置いてきぼりにせず、どんなことを不安に思っているか、何を感じているか、今後もより多くの高校生の声に耳を傾け、声なき声を拾い続けていただきたいです。

どんな環境の子ども・若者も諦めることなく自分の望む進路選択ができるような教育を実現してください。